

日港間で感じる認識 GAP

香港日本人商工会議所・香港日本人倶楽部 事務局長 伊藤 亮一

2019年7月、4年にわたる香港での任期を終え、私はジェットロの東北統括センター長として仙台に赴任しました。その半年後、コロナ禍



が世界に広がったことで東北の企業も大打撃を受けました。日本の経済が疲弊を続ける中、海外にはいち早く経済活動の再開に踏み切ったところがあり、海外市場に目を向ける企業が増えたことも事実です。

そうした企業を各地の自治体はジェットロ地方事務所と一緒に支援するのですが、私は食材を中心に旺盛な需要がある香港向けビジネスを提案しました。香港の魅力を感じ取った宮城県は輸出に意欲のある県内企業・生産者を推薦してくださり、香港企業との商談に成功。今では日本国内の余ったものを輸出するのではなく、香港仕様の食材を生産し、高値で輸出するまでに進化させています。

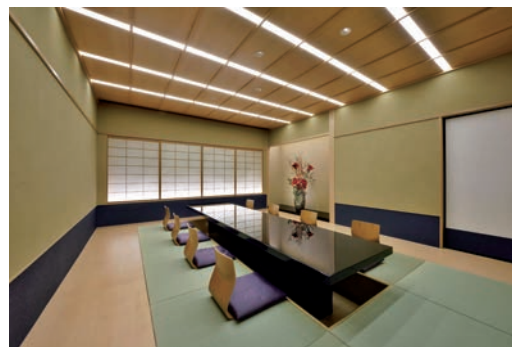
ところが某自治体の市長には「あんな危ないところに輸出なんてできるのか」と言われました。この記事を読んでいる香港に関心のある方を除き、日本の多くの方はこうしたイメージを持たれているのではないのでしょうか。

翻って、現在の香港。私は今年の4月から香港日本人商工会議所と香港日本人倶楽部の事務局長として香港に戻ってきました。後者は会員制のクラブで日本食のレストランも運営していますが、日本人駐在員が減少する中、香港人の会員が急増しています。香港人が会員になるためには事務局長の面接を受け、倶楽部理事会の承認を得

なければならないのですが、その面接で感じるのが香港人の日本に対するあくなき探求心と、日本人以上に日本のことを知っていることです。

コロナで海外に息抜きに行けない香港人は、食べることでそのストレスを発散させていると言われていますので、日本人倶楽部のレストランを利用するために会員登録していることは承知しています。ただ単にレストランを利用したいからだけでなく、日本食の奥深さ、日本文化や歴史もしっかり理解した上で利用したいと考えていることが、インタビューから汲み取ることができます。

残念ながら日本人が香港に持つイメージ・情報量と香港人が日本に持つものとの間には大きな乖離があります。香港で会員向け業務をする身としてはなかなか、日本にいる日本人に情報を発信できません。コロナが収束し往来の自由が復活した際には、日本からの来港者に対して香港の魅力をわかりやすく提供できるように準備をしておきたいと思います。



さくら和室（香港日本人倶楽部）
撮影・高島兼吉（TAKA WORK SHOP CO., LTD）

2022年9月発行（禁断断転載）

目次

日港間で感じる認識 GAP	1
「香港日本人学校OBOG再交流の広場」(座談会) 第7回	2
私と香港ビジネス ダイバーシティに学ぶ	4
香港隔離ホテルの1週間	5
香港貿易発展局トップが久々の訪日	6
連合会・各協会便り	
全 国：アジアフォーラム参加報告	7
東 京：横濱ドラゴンボートレース2022「飛龍艇」参戦記	8
関 西：法人会員交流会開催	
文化部長親行事—劇団四季公演「オペラ座の怪人」観劇会	9
中 京：香港街市雑記帳 (2)	10

九 州：香港と九州の未来をつなぐ	11
山 形：米沢市ホストタウン推進事業を振り返って	12
北海道：香港へ北海道産米を輸出	
香港からの訪日ツアー再開	
香港不動産会社による対道投資	13
宮 城：地方の老舗筆筍店がハッピーバレーで店を構えるまでの道のり	14
沖 縄：沖縄の餃子を香港へ	15
広 島：広島日本香港協会令和4年度通常総会	16
新 潟：『香港特別行政区設立25周年記念 昼食講演会2022』を開催	17
高 知：香港特別行政区設立25周年記念昼食講演会 2022	
九州方面研修視察旅行	18

「香港日本人学校OBOG再交流の広場」(座談会) 第7回

ゲ ス ト：松山(塚本)亜紀さん、大須賀典子さん、
栗山欣也さん、玉川岳郎さん

司会／構成：伊東正裕 (NPO 法人日本香港協会 広報委員)

撮 影 協 力：粵港美食二商店



玉川さん・大須賀さん・松山さん・栗山さん・伊東 (左から)

——今回は、1969～70年生まれで、小・中学校時代を香港日本人学校で過ごした同級生の方々にお集まりいただきました。自己紹介と香港との関わりについてお聞かせください。

松山 私は1978年に小学3年で香港に行き、中学2年の夏までいました。着いたのは3月でしたがもう蒸し暑くて、街はよく言えば活気があり、悪く言えばごちゃごちゃ。マンションが崖にへばりつくように建っていて凄いというのが印象でした。香港日本人学校では小学3年生から英語の授業がありましたが、私はアルファベットの書き方も分からないのに、英国人のフォックス先生は日本語を話さないし、ぜんぜん理解できなくて。でも同級生は皆よくできたんですね。なので、当時は英語に対する苦手意識がありました。

大須賀 私は1980年の小学4年生の3学期から行きました。中学卒業まで日本人学校に通い、その後は現地校のセントジョージに移りました。香港の第一印象は「香港人って強いなあ」でした。街では皆大きな声で喧嘩するように話しているし、美人のアナウンサーでも言葉は喧嘩しているように聞こえる。当時私は広東語のことを「世界一、人がブスに見える言葉だ!」と思ってました(笑)。もともと英語が好きだったのもありイギリス系の現地校に入りましたが、もっと広東語を学んでおけばよかったと今になって思います。86年に帰国し、千葉の私立高校に2年から編入しました。

玉川 私は1983年に中学2年で転入、3年で卒業するまでの2年間香港島に住んでいました。千葉県野田市から香港に引っ越したのですが、当時野田の中学で男子生徒はみな丸刈りで、日本人学校では髪を伸ばせる環境になったのがうれしかったです。小学校はサンフランシスコにいたので、「アメリカの次はイギリス領じゃん」とウキウキしていたことを覚えています。学校が好きすぎて中学3年の時に仲間数名で学校に無断で泊まろうとしたら警備員に見つかって先生にかなり叱られました。その仲間達は世界各地で活躍していますから、今となって

はよい思い出です。

栗山 1977年の小学2年から5年間いました。本日のメンバーの中では一番古くから香港にいます。当初、香港はどんなところかと不安もありましたが、フラットの敷地内で遊んでいる子供が日本語を話していたので、「なんだ、日本人もいるじゃないか」と安心したものです。彼らから広東語を教えてやるよと最初に教わったのが「五個雪糕」(※註：広東語で「アイスクリーム5個」の意。発音が「ウンコシッコ」に近い)でした。香港ではさまざまなスポーツを楽しみました。リトルリーグでの野球、野球がオフシーズンの時はテニス。テニスは今も続けていて、スポーツ少年団を主宰して週末に小学生に教えています。日本から香港へ行ってテレビを見なくなったからか、スポーツに明け暮れる毎日でした。合唱指導に熱心だった安藤先生の影響を受けて、合唱にも注力しました。その帰国後、コンクールに出たり、大学ではグリークラブに入りました。考えてみれば、今も続けていることは、香港での経験が原点にあるんです。

玉川 香港では音楽友達がたくさんできて、大須賀さんはその一人です。自宅が広かったのも、そこでライブをやったり、それがきっかけでバンドを組んだりもしました。学校では放送委員になり、校内放送でいきなり大好きなロックをかけたらか叱られた記憶があります。

大須賀 玉川君は放送委員として、いろいろな音楽を聴かせてくれるリスニングパーティーを開いてくれましたよね。そこで知って好きになったアーティストもあります。

松山 香港は暑いので体育の水泳の期間がすごく長かったですね。25メートル泳げる子は白帽子で、泳げない子は黄色帽子でした。3年生で泳げなかったのは私ともう一人の子だけで、親にYWCAに入れられて何とか泳げるようになって白帽子になりました。

栗山 私は児童会長をやったので、その恩恵でよい思い出を作りました。現地の人との交流会に私ともう一人女の子が呼ばれ、日本文化の紹介ということで鯉のぼりを揚げたのですが、それが新聞にも載ったんです。巨人の藤田元司監督と原辰徳選手が学校に来たことがありましたが、私は野球をやっていたので、原さんにサインを教わりました。

大須賀 日本人学校の校歌を作曲した服部良一さんが学校に来られた時は、生徒全員がご本人の前で校歌を披露するので、予め猛特訓して歌いましたね。

栗山 校歌は広東語版もありました。現地の学校との交流会などで歌うんです。すると向こうは「さくらさくら」を歌ってくれたりする。そういった国際交流は香港ならではの、楽しかったですね。

——香港といえば、おいしい食べ物です。食の思い出はいかがですか。

松山 日本から父の仕事の関係のお客さんが来ると、家

[香港日本人学校・同級生の座談会]

族も一緒に食事に行くので、一流の中国料理が食べられました。日本では外食はほとんどなかったので家族のよい思い出です。

玉川 慣れるって怖いですよ。香港ではすごく太くて大きいクラゲの前菜や、フカヒレスープを日常的にいただいていた。後に日本ではとても高いことを知ってびっくりした覚えがあります。

大須賀 北京ダックも半羽とか1羽で頼むのが当たり前だと思っていたら、日本ではすでに巻いてあるのが1本出て来て、お上品なんですよ（笑）。

栗山 小さい茹でエビを、自分で殻を剥いて食べるのはおいしかったですよね。

松山 私たちはぜいたくな生活をしていたんですよ。

栗山 果物は種類が豊富で最高でした。好きなのはライチでした。

大須賀 私はライチとマンゴー。

松山 ライチは凍らせてお弁当に持っていきました。食べる時も冷えていておいしかった。

玉川 私はマンゴスチンかな。

松山 市場にはグロテスクな動物もたくさん並んでいて、ちょっと苦手でした。

栗山 アヒルの舌が山盛りになっているのがありましたね。アヒル何羽分だろうというくらいたくさん。

——それは上海料理のおつまみですね。醤油漬けにして骨ごと食べます。

大須賀 中学部がノースポイントのブレイマーヒルに移ってからは、学校の帰り道によくスーパーのパークンショップでチャーシュー饅頭を買ったり、屋台でカレー団子を買ったりしていました。

松山 私も屋台でフィッシュボールやベビーカステラとか買い食いしていました。

玉川 油で揚げた豆腐に豆板醤をかけた食べ物ありましたよね。あれ、すごく臭いけど旨いんだ。

——最後に、香港の生活が皆さんのその後の仕事や人生に与えたものは何でしょうか。

栗山 多感な時期に香港に住んで学んだことは、人見知りをせず、多様性を認めようということかもしれません。また、自分は、性格的に何でもチャレンジしてみようという気持ちを持ち合わせていますが、これも香港で身につけたことかもしれません。社会人になってからは日本香港協会でのボランティア活動で横浜ドラゴンボートレースの参加企画を担当しています。日本人学校の同級生にも広く声を掛けて、世代を超えた新たなつながりを作っています。こうして「香港」をキーワードに長くお付き合いできる友達ができしたのは財産ですね。ちなみにドラゴンボートレースは、毎年50艇くらい出場しているので上位入賞は難しいのですが、玉川さんと一緒に出たレースで一度だけ3位入賞を果たしたことがあるんで

すよ。

玉川 私にとっての香港はイギリス文化の香港でした。欧州とアジアが入り交じった混沌のなかに秩序があり、みんな異なっている、社会は創られるということを学びました。日本ではよく「普通はこうだ」と言う人がいます。その地域の常識のもと同調圧力が働く社会です。私はこの「普通」という言葉に反発心をおぼえるんです。「そもそも普通って、何？」ってね。みんな違っていいし、私にとっては「君、変わってるね」と言われる方が褒め言葉です。違っていても、100%賛同しなくても、でも聞く耳は持とうという考え方を学んだのが香港だったと思います。

松山 日本人学校は転校生が多かったからか、とても開放的だったし、日本全国各地の子が在籍していたことで多様性を学びました。一方で、海外帰りのために英語ができない「中途半端な帰国子女」というのが、ある意味、ずっと私のコンプレックスでした。でも負けず嫌いの性格なので、英語ができるようになりたいと頑張り続けさせてくれたのが、香港が私に与えた最大の試練だったかもしれません。その後、カリフォルニア大学に1年間留学して英語が得意になって初めて、私の中で「人生の辻褄が合った」と思いました。卒業後はずっと外資系の会社で働いています。

大須賀 私は逆に英語が肌に合いました。香港ではさまざまな音楽を聞いて、仕事は音楽雑誌の編集者をやり、現在は英日の翻訳家になりましたので、好きなことを仕事にしています。この出逢いは全て香港で得られたもので、当時の生活がそのまま人生に影響していると言っても過言ではありません。香港ではクルマが来ていなければ平気で道路を横断しますが、それは香港人ならではの合理性なんですよ。自分の肝が座った性格も香港にいたからこそなのかなと思います。親が転勤族で何度も引っ越しをしたので、定住意識というものがあまりないのですが、出身地を言うとしたら、私は香港だと思っています。

——本日はお忙しいところ有難うございました。皆さんは、香港というユニークな場所で、しかも日本人学校に通ったからこそ様々な経験ができて、それが現在の生活や職業に活かされている、素晴らしいことだと思います。ますますのご活躍をお祈りしております。



香港日本人学校在籍当時の玉川さん、大須賀さん、松山さん、栗山さん（左から）

私と香港ビジネス ダイバーシティに学ぶ

NPO 法人日本香港協会 理事 貴島 道太

「痛い、痛い！」催涙弾とは涙が止まらなくなるものかと思っていたが、浴びると肌が痛い、とてもその場にはいられない。覆面にゴーグル、更に露出した腕にラップを巻いて催涙弾を投げ返す若者の行動が理解できる。2019年のある日曜午後、香港島・銅鑼湾、散髪をして道に出た瞬間デモ隊のど真ん中に自分がいる、図らずも人生初の催涙弾を浴びた瞬間でした。

私は2017年から三井住友海上香港現地法人に駐在員として勤務。当現法は15年程前、英国保険会社の香港事業を買収したことをきっかけに、非日系、特に香港・マカオのローカルをメインにビジネスを展開。私自身は香港日本人商工会議所や香港日本人倶楽部の理事をさせていただきましたが、会社での業務は英人CEOの下、香港ローカルに没頭する日々でした。



会社のアニヴァーサリーパーティー

会社が英国文化な為、社内公用語は厳格なブリティッシュイングリッシュ、東南アジア駐在歴のある私には厳しい環境です。広東語を学んでひとりローカル飲茶を楽しむ夢は捨てて、蘭桂坊（ランカイフォン・香港セントラルの欧米式カフェ）を目指すことに、そして、ネクタイは右下がりのストライプ、ポケットの無いワイシャツ、ひも付き革靴と英人を意識する日々。自宅ではBBCチャンネルを流しっぱなしにして、政治・経済・スポーツの話題にも対応するよう努めました。努力の甲斐あり仕事の話は概ね問題無いのですが、英人の皆さんとのゴルフやランチは心落ち着かないものでした。それでも香港ラグビーセブンズ（7人制ラグビー）イベントで、スタジアム中の欧米人と肩を抱き合いながら「Sweet Caroline」を合唱する場面では、私も一端の英国風アジア人に見えたことでしょう。

グルメではない私も多種多様な食事を楽しみ、帰りはスターフェリーやトラムに乗って、香港を心身共に感じる至福のひと時でした。安い公共交通機関の横を最高級の外車が行き交い、古い香港映画のワンシーンのようなボロアパートと並んで、一部屋10億円以上もするマンションがそびえ立つ。シンガポールより圧倒的に生活感が漂い、混在した街並みと言われる所以です。

我がビジネス損害保険事業ですが、台風損害や医療保

険支払いが莫大な難しいマーケットに100社を超える保険会社が乱立し、更に中国本土のインターネット保険会社と戦う厳しさは想像を絶します。当社では香港の大物投資家、政治家、地場銀行、コングロマリットとの関係、ネットワーク構築に時間をかけて取り組んできています。幸い日本と香港



映画トランスフォーマーで使われたボロアパート

の特別な関係を象徴するイベントが繰り返され、日系商社や銀行の方々からサポートをいただき公私共に香港の大物財界人と繋がることができ、今でもLINE交換しています。

今年香港は英国から返還25周年の節目の年、私が赴任した時は20周年記念行事が各地で華々しく開催されていたことを思い出すと寂しく感じます。ただし、中国本土の観点、中国ビジネスの目線、欧米にマーケットを独占されていた領域からの奪回等、立場や見方で真逆の感覚を抱くものです。日本も近年ダイバーシティを許容することの重要性が語られるようになりましたが、人種、文化、歴史、階層、これほど多様性に富んだ場所はない。主義や主張を抑えるのではなく、価値観の共有を捨てるものでもない。相手の立場を理解して尊重することができれば望ましいのですが、おそらく多くの場合理解しようとすることは諦めるべきというのが持論です。本当はもう少しネイティブに英語を喋って、ちょい悪欧米人と深い議論をし、広東語を喋ってもっと香港人の本音を聞きたかったと振り返ります。

「聞く力と決断と実行」、これが日本の政権運営だそうですが、香港ビジネスでは覚悟を持ってこれらを実践していくべきと感じます。2047年、成熟した日本香港のビジネス関係がありますように祈念致します。



ラグビーセブンズ

香港隔離ホテルの1週間

NPO 法人日本香港協会 事務局 野原 南海子

飛龍99号にて「香港と日本における出入国および隔離について」という2021年末の体験談が掲載されましたが、香港入境後の隔離ホテル生活について、を2022年4月上旬（隔離期間は1週間）の体験をお伝えします（ホテルにより対応が違いますことをご了承ください）。

◆ 隔離ホテルまでの道のり

夜10時に香港国際空港着、事前に登録しておいた香港政府指定の書式の確認を受けた後、PCR検査実施。陰性の診断を受けて、無事入境したのが日付が変わった午前1時。預けた荷物を受け取るときに目の当たりにした光景は、停止したターンテーブル前にずらっと並べられた数百個(!)のスーツケース。普段はターンテーブルで回ってくる自分のスーツケースを探せばいいのですが、回ってこないスーツケースのために自分がターンテーブル前を回って探すという人生初の体験をし、目が回りました。荷物を回収後、隔離ホテルの行先毎に分かれてバスに乗りましたが、午前2時をまわろうとしているのに、防護服を着た大勢の係員がてきぱきと対応してくださる姿には頭が下がりました。

◆ 隔離ホテル到着後

午前3時にホテル着。フロント人員も防護服着用。隔離生活マニュアル、1週間分のPCR自主検査キットと記録用紙を渡された後、5日目の対人PCR検査及び部屋を無断で出た場合の高額罰金（最高1万香港ドル）について説明を受け、やっと入室できたのが午前4時。部屋にはミネラルウォーターの4.5ℓボトルをはじめ、杯麵（カップヌードル）や汽水（炭酸飲料）、薯片（ポテトチップス）などのウェルカムフード（歓迎ムードさらさらなし）及びカトラリーとカップが置いてあり、使い捨て掃除セット（部屋用とトイレ用）、消毒液等が準備されていました。タオル類は3日分が置いてあり、「水とタオルは電話をくれれば追加・交換します」と書いてはあるものの、肝心要の電話は線ごと引き抜かれており、どうやって連絡するの!と思った次第。水については空のボトルを出すときに「我要再一樽水」のメモを添えて出して無事にもらえましたが、タオルはあきらめました……。

◆ 隔離の食事について（隔離ホテル料金に、食事代も含まれています）

定時に、温かくておいしくてバラエティに富んで、しかも適量の食事を届けてくださって本当にありがたかったです。一食ずつご紹介したいところですが、紙幅がかなわず、写真をご覧いただければと思います。朝は軽食、昼と夜は鶏肉・魚がメイン、たまに牛肉。1回だけ出た豚肉は大豆ミート代用のもの（つまりハラルフード）。それに野菜とジャスミンライスの組み合わせ。毎日フルーツがついて、1日おきにデザートも! 諸先輩方の隔離飯体験談をネットで拝見し、正直おびえていたので、予想外のうれしさ&おいしさでした。オートミールとパ



ン、お粥と粽という炭水化物祭りの組み合わせを見た瞬間に、ああ本当に香港にいるんだなあとしみじみと思いました。りんごが日本のものとは違って小さくて酸っぱいのも懐しく感じました。

メニューが無かったので何が届くかわからない! ワクワク感たっぷり! 毎食、本当に楽しみでした。たまに嫌いなものが入っているとへこみました、自分で作らなくていいだけ幸せすぎて、嫌いなものでもありがたくいただきました（帰国後体重をはかると2キロ痩せていました…どれだけ健康的な食事だったことか）。

食事はピンポンダッシュで部屋前に置いていかれます（ピンポンダッシュを毎日体験するとは笑）。隔離中、ドアを自ら開けていいのは、食事の受取・容器返却とゴミ捨て、政府によるPCR検査のために係員が来る時だけです。それ以外でむやみにドアを開けるとどうなるか……は、罰金と禁固刑が怖くて試す気も起きませんでした。

簡単ですが、「隔離ホテル（飯）生活」のご報告でした。私にとって「三食昼寝付き」の天国のような1週間で、これなら（隔離の最長期間だった）3週間でもイケる! と豪語しましたが、1週間でも高額出費だったのに3倍は無理……。冗談はさておき、近いうちにこの私の体験談が無駄になる、つまりは隔離がなくなる日が来ることを切に願っています。

余談として。隔離のご褒美として香港・設計廊（Design Gallery）という香港貿易発展局のお店に行き、香港の地図柄の傘を買いました。日本香港協会の会員証を出せば10%オフのはずが、見事忘れてしまい、定価で買うはめに……。会員の皆様方は、会員証を持っていくのを忘れずに!!

<https://hkdesigngallery.hktdc.com/en/main/stores.aspx>

香港貿易發展局トップが久々の訪日

NPO 法人日本香港協会 会長 佐藤 征洋

さる6月2日、日本政府による海外からの来訪者枠を広げるニュースと時を同じくして、香港貿易發展局（TDC）のピーター・ラム会長とマーガレット・フォン総裁が来日、過密スケジュールの中、当協会の理事4名が昼食会への招待を受けるという榮譽に浴しました。6月1日に成田に到着されたお二人によりますと、入国手続も極めてスムーズで、これから徐々に往来も元に戻るであろうと大変明るい表情だったのが印象的でした。食事を囲みながらのざっくばらんな意見交換では、話題は多岐に亘りましたが、前向きな明るい話ばかりとなりました。

協会側からは、先ずは最大の関心事であり、大多数の香港 Lover が入境時の隔離の緩和を望んでいることを申し上げ、来る「香港フォーラム」は是非リアルで開催頂きたいとお願いしました。会長、総裁からも全く同感であり、現在 TDC としても、政府の主管部門への働きかけなど最大の努力をしているとのことをお話を頂きました。

ビジネス面につきましても、日本と香港間の最近の状況についての意見交換を行いました。日本のマスメディアによる政治中心の報道では、中国、香港についてバイアスのかかった記事が多いため、特に影響を受けやすい中小企業に対して、現実を理解して自信を持って貫くよう努力すること、香港、大湾区、中国への進出に際し、TDC と協会でも更なる支援をしていくことについて、相互確認いたしました。

一方、香港の人々も日本への渡航再開を歓迎しており、会長自らも2年前までは1カ月に2回は訪日していたとのこと、今後のインバウンドの回復が大いに期待できるものと思われます。話題は香港での日常生活に密着した最新事情にまで及び、日本食品に対する需要拡大、とりわけ日本の鶏卵が店頭で瞬く間に売れてしまう、それまで生卵を食べる習慣がなかった香港人の食生活を変えてしまったのは、日本の食材が大好きということにとどまらず、日本製であるから清潔かつ高品質で安心して食べられることが原因とのことでした。

変化の激しい香港が、この2年間余りでどう変わったか、今後の変化も見越して双方で更にビジネス交流を促進して行くことを確認しました。待ちに待った日本と香港間の本格的な交流の復活と再活性化に期待したいと思います。



前列左からフォン総裁、佐藤会長、ラム会長、後列左から2人目桜井理事、同3人目野島副会長、同4人目萩原理事

宮城日本香港協会 会長 小野寺 初正

香港貿易發展局（TDC）のマーガレット・フォン総裁が、仙台市を訪問された折、当宮城日本香港協会幹部が昼食会に招待されました。話題はやはりビジネスが中心となりましたが、当協会が取り組んでいる課題や時節の問題に対して、終始和やかな雰囲気ですべて話を聞かれました。

香港への輸出の目玉は何ですかとの問いかけに、日本米を使用したおむすびチェーン「華御結」を展開する百農社との間で輸出によるコメ取引の合意に至ったことから、輸出用米を生産する4つの農事法人と株式会社舞台ファーム（仙台市）による「中埠地域『みやぎ米』輸出拡大プロジェクト」（宮城県、美里町）が発足したことや、今香港で話題となっている生卵を食べる習慣に、実は宮城県栗原市の養鶏会社「栗駒ポトリ」で生産されている「栗駒卵」が大きく貢献していることが紹介されました。また、お米といえばやはり話題はお酒に。宮城には美味しい日本酒がたくさんあると聞いているが香港への輸出はどうかとの問いかけに、県内の生産量が限定的で日本国内で消費されてしまうため、なかなか香港までは輸出されている清酒は少ないが、「一ノ蔵」とい

う銘柄は香港の居酒屋でも取り扱われていると伝えたと、総裁から銘柄の漢字名称について広東語で聞き返されるなど、興味を持たれたようでした。

さらには、県内で大きな課題となっている空の便の活性化に話が移りました。香港・仙台間の直行便の再開、そして利用者を増やすには仙台空港の24時間営業が欠かせない条件であることが話し合われ、今後双方協力してその実現に向けて努力していくことになりました。

短時間ではありましたが、本昼食会での意見交換は、宮城県と香港とのビジネス交流に大きな布石を投じる機会となりました。



左から、武田事務局次長、大坪代表理事、小野寺会長、伊藤副代表理事。右から3人目がフォン総裁



NATIONAL

全国連合会

NPO 法人日本香港協会 会員 ハッ橋 公彦

アジアフォーラム参加報告

香港ビジネス協会世界連盟・香港貿易発展局主催によるアジアフォーラムが、8月2-3日、シンガポールにて開催されました。対面形式でのフォーラムは2019年のベトナムホーチミン以来3年ぶりとなります。香港返還25周年という節目を迎えた本年のアジアフォーラムでは、香港ビジネス協会世界連盟のアジア・オセアニア地区メンバーである日本、カンボジア、中国、インドネシア、韓国、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、台湾、タイ、ベトナム、そしてホスト国のシンガポールから29名がリアル参加、オンライン参加者を含めて合計68名が出席しました。日本からは全国連合会の佐藤会長をはじめ、東京、関西、九州の各協会から合計7名が対面形式で参加、オンラインでは宮城と関西から2名の参加がありました。

◆ 全体セミナー

「RCEP（東アジア地域包括的経済連携）、GBA（粤港澳大湾区）と香港：シンガポールのビジネスにもたらすもの」というテーマで、香港貿易発展局Irina Fan氏（リサーチ・ディレクター）、インベスト香港Jimmy Chiang氏（アソシエイトディレクター・ジェネラル）、香港工業貿易署Rita Man氏（プリンシパルトレードオフィサー）らがオンラインで講師として登壇し、GBAの将来の可能性とRCEPやCEPA（香港と中国本土間の経済貿易緊密化協定）の制度に関する解説に加え、シンガポールの中小企業がCEPAを活用してGBA市場に進出したサクセスストーリーの紹介もありました。

◆ パネルディスカッション

パネルディスカッションでは実業家も加わり、「アジアでビジネスを展開するために如何に商機を掴み取るか、また直面する課題やチャレンジは何か」というテーマで活発な意見交換が行われました。パネリストは、マレーシア香港協会Dixon Chew氏（会長）、Endowus社Gregory Van氏（CEO）、UOB社Ricky Ng氏（ホールセール部門ヘッド）、インベスト香港Jimmy Chiang氏（アソシエイトディレクター・ジェネラル）らがオンラインと対面のハイブリッド形式で参加しました。モデレーターは香港貿易発展局Peter Wong氏（東南アジア地区リージョナルディレクター）が務めました。シンガポールと香港は比較されることも多く、それぞれの都市が有している優位性も多く多くの点で共通しています。それでも香港ではGBAという地理的優位性、シンガポールにはデジタルテクノロジーという固有の優位性があり、それぞれの強みを活かした役割を果たすことが期待されているという意見もありました。

◆ インターナルミーティング

香港ビジネス協会世界連盟に加盟しているアジア・オ



セアニア地区協会の代表から、活動報告がありました。日本からは全国連合会・NPO 法人日本香港協会の佐藤会長が登壇され、全国各地の11の協会におけるこれまでの活動内容を写真と共に説明されました。「飛龍」100号にはアグネス・チャンさんの祝賀メッセージが表紙を飾ったことなども紹介されました。

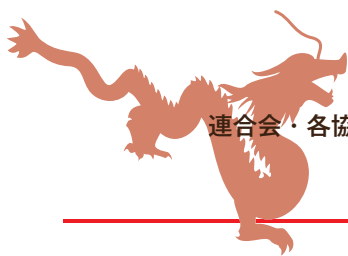
◆ ガラディナー

香港特別行政区政府主催で、「香港返還25周年記念ガラディナー」がシンガポールを代表するホテルの一つであるFullertonホテルで開催されました。ガラディナーにはアジアフォーラムへの参加者、シンガポールの政界、経済界、ビジネス団体から多くのVIPが招待され、総勢300名近くが出席しました。ガラディナーはライオンダンスのパフォーマンスから始まり、中国弦楽器を使用した演奏、アカペラの合唱、そして会場の明かりを落として「LEDペインティング」のパフォーマンスも行われ、大いに盛り上がりしました。30卓用意されたディナーテーブルは、感染対策に気を付けながらも久しぶりに見る人の熱気にあふれていました。

◆ アジアフォーラムに参加して

シンガポールでは今年4月に入国前の検査義務が撤廃され、ワクチンを接種している日本人はコロナ前と同じようにスムーズに入国することができるようになっています。街中では今でも大多数の人がマスクを着用していますが、いよいよシンガポールは「ウィズコロナ政策」に舵を切っており、以前の日常を戻しつつあることを実感しました。思えば、私がシンガポールに駐在していた頃、2003年にSARSの流行を経験し、よく聞かれたのが“Life goes on”という言葉。つらいことがあっても人生は続くのだから、といったニュアンスで使われていますが、まさに長引くパンデミックを乗り越えるには、知恵を出し合って、これまでの日常を戻していくことが大切であり、今回リアルで開催されたアジアフォーラムは“Business goes on”に対応する一つのヒントを与えてくれるイベントとなったと思われれます。





NPO法人日本香港協会

横濱ドラゴンボートレース2022 「飛龍艇」参戦記

◆ レポーター：中里 貴之(会員)

2022年6月5日(日)、山下公園にて「横濱ドラゴンボートレース2022」が開催され、主催団体でもある日本香港協会は、チームを結成して「飛龍艇」としてレースにも参加しました。

東京オリンピックのボランティア活動でも一緒させて頂いた、日本香港協会(東京)理事の栗山欣也さんに誘われての参加で、ボート初挑戦ながらも太鼓担当という大役を命じられ緊張しましたが、チームの方々が優しいばかりで助かりました。

レース当日、会場に到着すると蛍光イエローのお揃いチームウェアが配られましたが、レース実況者や他のチームの方からも「すごい派手ですね!」と噂になっていました。レース前は、山下公園の芝生の上にみんなが集まって掛け声や漕ぐ練習をし、当日初めて顔を合わせた方も多かったですが、次第にチームとしての団結力も高まり、気合十分で本番に挑みました。

いよいよレース本番! 2回漕いでタイムの良い方で上位3チームが本戦に出場。我が「飛龍艇」の1回目のタイムは1分46秒で、本戦に進む上位3チームに入るには1分台前半のタイムが必要となります。1回目のタイムを上回ることを目標に2回目にも挑みましたが、結果は1分44秒。残念ながら本戦進出とはなりませんでしたが、1回目を2秒縮めるタイムで参加者には達成感と満足感で笑顔が溢れていました。



戦いを終えた「飛龍艇」

レース後はチームメイトと一緒にレースを戦った、「Carbon Brews」さんより、香港クラフトビールが振舞われ、レース後の心地よい疲れの中、最高に美味しい乾杯となりました!

無事にレースを終えて、打ち上げは横浜中華街に繰り出し、美味しい料理と共に改めて乾杯! 初めての参加でしたが、お陰様で最高の経験をさせていただきました。お礼も兼ねて当日の模様について動画*を作成したのですが、その動画があっという間に500回近くの再生回数となり、あまりの反響に驚きました。



ドラゴンボート動画

* <https://www.youtube.com/watch?v=MPocrNMNwmE>

来年も是非参加したいと思いますので、また皆様と一緒にできることを楽しみにしております!



「飛龍艇」メンバーと日本香港協会の応援団。前列右から3人目が中里さん、中列右から2人目が村田さん、3人目が樋口さん

◆ レポーター：樋口 由美(会員) & 村田 典子(会員)

日本香港協会の広東語教室でともに学ぶ私たちは、香港俳優・呉鎮宇(フランシス・ン・ジャンユー)の推し仲間でもあります。悩みを抱える4人のおじさんたちがドラゴンボートのレースに挑む彼の出演作『逆流大叔(Men On The Dragon)』(2018、日本未公開)が授業で取り上げられてすっかり夢中になり、いつか自分でも漕いでみたいと思っていました。その機会がようやく巡ってきた今年の「横濱ドラゴンボートレース2022」。私たちはチーム「飛龍艇」の一員としてレースに参加しました。

お揃いのTシャツに身を包み、直前練習を経ていざ本番! 乗船してみると、ボートは思っていたよりずっと幅が狭くて海面すれすれ! ライフジャケットを着ていても少し怖くなりました。太鼓に合わせて一斉にパドルで水を掻くのは本当に難しく、コツがつかめないとすぐにパドルを水に持っていかれてしまいます。テンポが合わないブレーキになってしまうので、ほかのメンバーの邪魔にならないようにレース中はとにかく必死で漕ぐ! 漕ぐ! ゴールまでの260mの距離がとてつもなく長く感じられました。

目標の決勝進出はなかったものの、皆でボートを漕ぐ一体感や、ゴールして戻ってくる時により感じられる海風の心地よさは格別でした。そして何よりも、愛する『逆流大叔』のおじさんたちと同じ体験をしたという充実感! 映画の中で「節奏(リズム、テンポ)」の大切さを語っていたのがよくわかり、レース後にもう一度DVDを観て、彼らがどれだけ大変なことをやっていたのかを実感として感じる事ができました(映画の中で挑むのはなんと5kmの長距離レース! 考えただけでめまいがします)。

1本の映画を観たことからこんな素晴らしい体験ができて感無量です。チームの仲間たち、大会関係者並びに日本香港協会の皆さま、応援に来てくださった教室の先生とクラスメートに深く感謝します。来年もぜひ、今度は経験者として参加したいです。ありがとうございました!



KANSAI

関西日本香港協会

関西日本香港協会 事務局

法人会員交流会開催

当協会では法人会員、協会役員、香港貿易発展局との交流を促進し、香港や中国、アジアとのビジネスへの理解を深める目的で法人会員交流会を年2回開催しています。新型コロナの感染が始まった2020年以降は、大阪府によるコロナ対策会食自粛規制により交流会の実施が難しくなりましたが、今年はコロナ感染者数の一時的な大幅減少で5月22日に会食自粛規制が解除になりましたので、6月28日に中華料理「錦城閣」で第一回法人会員交流会を開催しました。久しぶりの対面会食懇親会でしたので、24名が参加して盛会でした。レストランの部屋から望む大川の夜景を眺め、藤岡料理長による極上の特別料理（冬瓜とふかひれの蒸しスープ、活車海老の湯引き、ホタテ貝の蒸し物など）を美味しくいただきながら大いに歓談し、会食を楽しみました。

会食に先立って、当協会の理事、香港貿易発展局大阪事務所長のリッキー・フォン氏が「香港の最新情報」について講話をされました。短い時間にもかかわらず、大変立派な資料を準備されて、香港のGDPと富裕層、香港の外出産業や建築デザイン業界、香港で進む都市開発（新国際空港）、大湾区（GBA）経済圏構想、香港の金融センターとしての役割、香港国家安全維持法の影響、などに関し解説されました。



大阪事務所長講演

1997年に英国から中国へ返還された香港は、「一国二制度」で順調に経済発展を遂げてきましたが、香港における暴動や破壊行為を抑制し、経済活動の安定化を意図した国家安全維持法は、一方で自由な活動を制限することにつながるのではないかと懸念する声も聞かれます。自由を望み中国本土並みの人権弾圧と中国愛国教育に抵抗する香港人の海外移住者が増えているようですが、中国から香港へ入ってくる中国人や大湾区（GBA）と一緒に発展する香港に注目して香港に来る外国企業も多く、これから先も香港の人口は増えていきそうです。また、



法人会員交流会

中国から海外への直接投資の66%、海外から中国への直接投資の75%強が香港経由になっているとのこと、香港が「中国の金融ハブ」になりつつある実態が理解できました。

香港人は日本が大好きです。特に日本食が大好きで、2021年度のデータでは日本料理店が1,350軒に増えており、日本産卵の人気の急上昇しているとのこと。また、2021年度の香港向け日本酒の輸出が前年比50.7%増の93億円となり、日本酒人気が高まっています。一大消費市場の香港は市民の購買力も高く、日本食材の香港向け輸出の増加が期待されています。香港政府の予想では現在の人口739万人が2043年には822万人になる見通しとのこと。香港は今後も重要な日本の輸出先であり続けることでしょう。

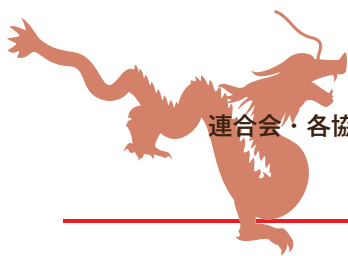
香港貿易発展局は日本政府と一緒に農水産物の香港向け輸出増強に注力中です。香港の政治が安定すれば、今後の香港経済の発展と大湾区（GBA）経済圏構想の下で発展する香港でのビジネスチャンスが大きく、リッキーさんの講話を聴いて、これからも香港とのよき交流を目指したいとの思いが強まりました。

文化部長懇親行事—劇団四季公演
「オペラ座の怪人」観劇会

文化部長主催の会員懇親行事として劇団四季の大阪公演「オペラ座の怪人」観劇会を5月14日(土)に開催し30名が参加しました。開演前にはロビーで会員の皆さんが親しく交流し、芸術性の高い素晴らしい舞台に感動し、記念撮影をして散会しました。



文化部長懇親行事



香港街市雑記帳 (2)

「小山理事いかがですか？」2003年5月中京日本香港協会、当時議長の小森副会長（元三井物産香港支社長）から唐突な提案が出された。香港特別行政区政府主催の国際会議出席依頼案件である。正式名称Briefing Programme on Hong Kong's Recovery from SARS July 8-10, 2003への中京日本香港協会代表として出席を乞われた。「21世紀の香港は女性進出も甚だしく本協会の代表者として是非」とのことで、1日考えた後にお引き受けすることにした。自営のデザイン事務所を持ち、専門学校2校のデザイン講師を務め、家には小中学生の息子と夫（夜中まで残業の設計士）+わんこ1匹、雑多なことが頭をよぎる。後に和僑会を立ち上げられた香港太陽商事の筒井社長からのお勧めもあり、それが出席への決定要因となった。



7月11日深圳視察
(前列右から2人目小山、右後方藤峰氏)

当時の香港のテレビでは、SARSのニュースが連日放映されており、世界へ向けてのSARS終息宣言アピールが目下の話題であった。香港貿易発展局（HKTDC）の大阪事務所からは、本プログラムに関連して、中国本土上海近郊の寧波市からも招待視察要請が入っている旨の連絡を受けた。行程が+4日となるうえに、当時はビザの取得も必要、体力勝負を覚悟した。

同年7月7日、名古屋から直行便で香港入り（CX533）、香港国際空港から手配のバスで市内入りし、香港島灣仔展示会場隣のルネッサンスハーバービューホテルへチェックインした。関西日本香港協会の藤峰副会長（当時）も寧波へ行かれるとのこと、心強い。同日夜、寧波プログラムのアテンドをしてくださるY. C. Fong氏、藤峰副会長と事前打ち合せ。

7月8日早朝からHKTDC総裁主催の朝食会議に出席、来賓は香港上海銀行会長であった。インベスト香港のブリーフィング、続いて昼食講演会が開催され、HKTDC副総裁とマーガレット・チャン衛生局長が講演。この中で、現関西日本香港協会の戒田会長（当時は事務局長）が早々に発言された。私にとっては、国際会議デビューで、当時のHKTDC古田大阪事務所長のご配慮で、香港随一の通訳の中村女史にサポートいただいた。仕事に関する自己紹介に続き、私の英語は旅行・打合せ・買い物専用でと少し参加者の笑いを得つつ、本日のSTRONG

SUPPORTERと中村女史を紹介、とここまで英語で話し場は和んだ。「今後不測の事態が起きたら日本は何を香港にすべきか？」と私が質問をした。センテンスごとに中村女史に通訳をお願いしたが、議長からは「まずは香港へ来てください。そして物事は又再び始まります」と解をいただいた。

同日夜は、HK Fashion Week Partyに参加。翌7月9日は香港サイエンスパーク視察、続いて香港政府行政長官主催の昼食会、18:00から在香港日本国総領事・香港日本人商工会議所・関係団体を招待したHKTDC主催晩餐会（パウヒニアレストランの広東料理）に出席、漸くとても香港らしい食事が味わえた気がした。「好味！」香港財界の方々が集まっていたので、デザイン事情についても詳しく話を伺うことができ、自分の次のシーンに繋げられるのではと手応えを感じた。

7月10日は、HKTDCのAlan Wong Director主催のBoat Cruise、夜はHKTDC主催のFashion Weekの会場を視察。7月11日は深圳テクノロジーセンターを訪問した後、日本未出店のカルフルを視察。広大な店舗内に大量の商品が高く積まれていて、ガムのSCを彷彿させた。当時、名古屋にはダイエー直営のKou'sがあったが、今でいうところのコストコか。深圳での昼食会で同卓のスウェーデン人が体調不良となったため、魚蝦蟹を避けて、鶏肉の別料理を注文し事なきを得た。夜は、空路で深圳→上海入り。ここからは日経新聞桃井記者が同行してくれたが、聞けば彼女は愛知のご出身、流暢な普通語が耳に心地よい。2時間後、上海国際空港に到着、空港外出口で猛烈な大歓迎一藪蚊の大群である。それからさらに2時間後、寧波の南苑飯店（五つ星ホテル）に到着。考えてみれば、香港は「飯店」よりも「酒店」の文字が多い。

翌12日は寧波市政府主催の海外貿易販路拡大会議、その後BOFTECとの昼食会、13:30より寧波市近郊の工業団地誘致候補地と巨大な寧波の港湾設備の視察。何もかもスケールが大きくて驚いた。中国本土ではデザイン性より大きさ重視かと感じた。13日は日曜日で、紹興市へ行くとと思っていたが3時間近くバスに揺られて太白山天童禪寺へ向かった。貫主御一同様の大歓迎の昼食（禪寺の精進豆腐料理）が振る舞われた。御寺所蔵の雪舟禪僧の水墨画作品を拝見し、思いもよらぬ出逢いに（初の雪舟禪師原画対面）大感激。翌7月14日は早朝5時起床し、朝第1便で帰名、奇しくも同日はパリ祭の日であった。



寧波省知事とのレセプション、日本土産贈呈



香港と九州の未来をつなぐ

◆ 香港における西日本シティ銀行の活動

西日本シティ銀行は、2004年に2つの銀行（西日本・福岡シティ）が合併して誕生した、福岡市に本社を置く地方銀行です。合併前の1985年から30年以上に亘り、香港および中国華南地区において、取引先企業の海外進出、投資・貿易の支援や市場調査などを行ってまいりました。



返還25周年を祝う香港の街並み

◆ 日本から見えていた香港と実際の香港

私の香港での勤務は、2021年7月に3週間のホテル隔離生活からスタートしました。香港への渡航前は、新任地での新たなチャレンジに期待が膨らむ一方、民主化デモの報道やコロナ禍への厳格な対策などから、多少不安も感じていましたが、着任以来、特段の不便を感じることなく過ごすことができています。

もちろん、香港の入境制限（執筆時点では7日間のホテル隔離が必要）や、中国本土の隔離政策により、香港経済もさまざまな影響を受けており、当事務所も、情報収集や来訪者対応といった活動はかなり制限された状態が続いています。近い将来、渡航制限がなくなり、人々が再び活発に往来できる日が来ることを待ち望んでいます。

◆ 香港での活動における注目点

さて、活動が制限されるなか、当事務所が注目しているテーマが「日本食」と「大湾区（GBA）」です。

まず、1点目の「日本食」について、香港は2020年まで16年続いていた日本の農林水産品輸出先の首位の座を中国本土に明け渡しましたが、日本にとって香港が重要なマーケットであることに変わりはありません。

当行では、これまで、取引先企業と香港の食品事業者との商談アレンジや、日本の食料品を数多く取り扱う香港企業を日本にお招きしてセミナーを開催するなど、取引先企業の香港への食品輸出を支援してきました。日本から香港への現地視察が困難な現状においては、現地のニーズに即した食の情報をもっと積極的に提供することにより、取引先企業の持続性のある輸出取引を支援したいと考えています。

もう1つの注目点である大湾区構想は、香港、マカオと深圳や広州などの広東省主要9都市を一体開発する構

想です。香港の金融や貿易における国際的なハブ機能や、深圳のハイテク産業やイノベーション拠点機能、マカオのレジャー資源など、各都市の特色を活かしつつ、より一体的な開発目標が掲げられています。非常に広範囲な開発構想であるため、日本企業にとってのビジネスチャンスが数多く存在するとともに、ハイテク産業やイノベーションの分野では日本が吸収すべきものも多いと思われます。また、この構想の進展により、2050年には域内人口が現在の約8,600万人から倍近くまで増えるとの予測もあり、消費市場としての魅力もより一層高まるものと期待されています。

◆ 香港と九州の未来をつなぐ

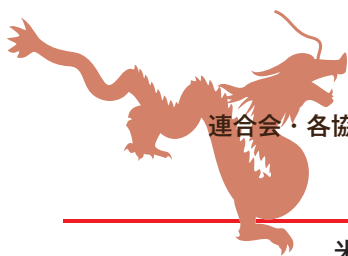
今年は香港の中国返還25周年を迎え、「従来（英国式）の資本主義体制や生活様式を返還後50年間維持する」とした一国二制度の折り返しの年でもあります。香港の未来がどのように変化していくかは予想が困難ですが、経済の面においては大湾区構想を通して更なる発展・拡大が見込まれます。こうした状況を取引先企業に適切にお伝えし、ビジネスの支援を行うことにより、地域経済の発展に貢献してまいりたいと考えています。



事務所近影（左が筆者）

令和4年度通常総会・講演会・懇親会開催

当会は令和4年度通常総会・講演会・勉強会を6月29日に福岡サンパレスにて開催しました。総会では令和3年度事業報告・収支決算、令和4年度事業計画・収支予算（案）、協会運営安定のための年会費改定（案）について議決されました。なお、講演会では福岡市の国際金融機能誘致の活動・成果について福岡市経済観光文化局国際金融機能誘致担当部長の松浦令治氏と当会会員のMCPアセット・マネジメント株式会社グループ創業者兼CEOの越智哲生氏にご講演頂きました。交流会にも約60名もの方々にご出席頂き、会場は大いに盛り上がりしました。



米沢市ホストタウン推進事業を振り返って

◆ ホストタウン登録

当市は、平成29年に内閣官房が推進する東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のホストタウンに登録されました。ホストタウンとは、地方自治体が大会参加国・地域との人的・経済的・文化的な相互交流を行い、地域の活性化や観光振興を図るものです。当市では、平成4年に山形県で開催された「べにばな国体」をきっかけに、盛んにフェンシング競技が行われています。また、当市を中核とする山形県フェンシング協会は、アテネ、北京オリンピックに出場した池田めぐみ選手をはじめ、世界大会出場選手などが多数所属する団体でもあります。さらに、当時香港フェンシング協会ジュニアチームの合宿地に日本フェンシング協会から当市が推薦されていたこと、山形県と香港の交流を深める山形日本香港協会が再開され、お力添えをいただいたことなどにより、香港フェンシング協会のホストタウンとなりました。



Team Challenge 2019交流試合

◆ これまでの主な交流

(1) 交流試合への選手招聘・派遣

当市では、山形県フェンシング協会協力のもと、香港選手と地元を中心とした選手との交流試合「パウヒニア・フェンシングワールドカップ」を開催しました。この大会は、平成29年度から令和元年度まで計3回開催し（令和2・3年度は新型コロナウイルス感染症の影響で中止）、令和元年度大会は地元ケーブルテレビが密着取材しました。そこで制作された番組は複数回放送し、交流の様子を広く市民にお伝えしたところです。また、令和元年5月に香港で開催された「Team Challenge 2019大会」に香港フェンシング協会からお招きいただき、地元の中高生フェンサーを派遣しました。



Team Challenge 2019派遣選手団

(2) 香港フェンシング協会ナショナルチームの来市

令和元年6月に15名の選手団が来市されました。地元小学生と交流会を開き、選手のお話を伺いながら一緒に模擬フェンシング体験を行ったほか、匂であるさくらんぼ狩りの体験などをし、米沢の魅力にも触れていただきました。



地元小学生との交流会

(3) ビデオレター交流

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会時の事前合宿・事後交流は、新型コロナウイルス感染症の影響により実施できませんでしたが、関係市民出演のもと、事前に香港フェンシング協会へ応援ビデオレターを進呈しました。それに対し、フェンシング競技男子フルーレ個人戦で金メダルを獲得された張家朗（CHEUNG Ka Long）選手から、お返事のメッセージ動画を受け取り、市民も勇気と感動をいただきました。

◆ ホストタウン事業を振り返って

令和2年度以降は、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、思うように交流ができなかった面もありますが、ホストタウン事業を通じて、フェンシング競技を行っている地元中高生の技術力の向上と、多様な価値観を体感することで広い視野で物事を見ることのできる国際性豊かな次世代を担う人材育成にもつながったものと考えています。

引き続き、米沢市民と香港の方々との間で、できる限りの交流を続けていきたいと思いますので、山形日本香港協会の皆様のご支援ご協力を、今後ともよろしくお願いいたします。



模擬フェンシング体験



米沢ホストタウン交流紹介番組



米沢応援メッセージ動画(英語字幕)



HOKKAIDO

北海道日本香港協会

北海道日本香港協会 事務局

北海道では新型コロナ禍の影響は3月21日にまん延防止等重点措置が解除となりました。その後も再拡大防止対策、感染拡大防止に向けた道民の皆さまへのお願い、などもあり、当会の活動は停止を余儀なくされております。

一方、北海道と香港の経済活動は止まることなく、日々刻々と動いていることを実感致します。今回北海道と香港を結ぶトピックスについてご紹介します。

香港へ北海道産米を輸出



契約締結式（写真提供：北海道庁）



米穀卸小売の松原米穀が2022年産の道産米800tを輸出することが決まりました。これは、昨年度に道内から香港に輸出された量にほぼ匹敵する量となります。輸出するのは、松原米穀が生産者と契約を行う直播向け新品種「さんさんまる」と多収品種「雪ごぜん」です。相手先は香港株式市場上場企業、香港最大級の食品会社である四洲集团有限公司（Four Seas Mercantile Holdings Ltd）で、同社はレストラン事業にも注力しており、懐石「四季・悦」、焼肉「Beefars」、寿司「SUSHIYOSHI 寿し芳」など日本食高級店も展開しています。食材に北海道産のトウモロコシなども使用していると聞いています。

公式ホームページ：Four Seas Group
<http://www.fourseasgroup.com.hk/us/>

同社創業者で会長のスティーブン・タイ（戴德豊）氏は香港貿易發展局が事務局を務める「香港・日本経済委員会」の委員の一人でもあります。5月31日に北海道庁にて松原米穀と四洲集團の契約調印式が行われました。



契約締結式（写真提供：北海道庁）

香港からの訪日ツアー再開

6月22日、2年以上に亘り停止していた香港からのEGL主催訪日観光ツアーが再開されました。第一陣は東京・北海道7日間ツアーで、観光客は香港に戻った後7日間の隔離があるにもかかわらず、日本へのツアーを心待ちにしていたようです。香港の方たち



大勢の取材陣に囲まれる日本ツアーへの参加者（写真提供：NNA）



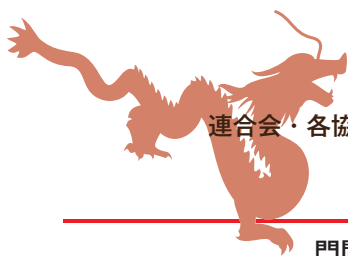
ツアー参加者に記念の「証明書」を手渡すEGLの袁会長（左）とケン執行取締役（右）（写真提供：NNA）

にとって身近な旅行先の一つであり、日本にとっても香港の方たちは身近な存在かと思えます。日本政府観光局（JNTO）の統計によりますと、2019年の香港からの訪日旅客数は229万800人で、その内およそ8%に当たる18万5,000人が来道されています。コロナが収束し、訪日ツアーが再開された暁には、これまで以上に多くの海外観光客が北海道を訪れることを期待しております。

香港不動産会社による対道投資

バンヤンツリーグループ（シンガポール）の公表によると、ニセコリゾートの中心地である倶知安町ヒラフ地区にホテル及びコンドミニアムの開発を計画、ホテルブランドは「カッシーア」とすると発表。バンヤンツリーグループが新たにパートナーシップを結んだのは、香港で不動産投資を手掛けるテラフォームキャピタル（Terraform Capital）です。

以上のように、行動制限や心理的に移動がしづらい状況にあっても経済の動き、人の動き、投資の動きなどが見られます。新型コロナの影響を受けながらも、今後の新たな動きに着目していきたいと思えます。また、早期の収束を祈るばかりです。



地方の老舗筆笥店がハッピーバレーで 店を構えるまでの道のり

弊社は1872年（明治5年）創業の仙台筆笥という経済産業省が指定する伝統的工芸品の老舗の製造元です。私は、その会社の7代目になります。2011年に発生した東日本大震災をきっかけとして、当時勤めていた会社を退職し、家業に入りました。私が家業に入った時点で、新規の仙台筆笥の売上はほとんどなく、一刻も早く、新たな商品開発や販路開拓等をする必要がありました。そのために、私がまず着手したのは、ブランディングと品質管理の強化からでした。そして、それらがある程度できるようになった時点で、販路開拓に着手しました。

従来の販路は仙台の自社店舗のみだったため、実験的に、東京や大阪等の大都市の百貨店へアプローチを行い展示販売会や催事等に参加してみました。売上也伸びるであろうと淡い期待をしていましたが、結果は、予想を大きく裏切るものでした。そこで、取扱商品を自社の仙台筆笥だけでなく、仙台筆笥を将来的に買ってくれるであろう潜在層の掘り起こしを目的として、日本の職人が作った、極めてデザイン性の高い無垢材家具の扱いを始めました。そのヨミは的中、ターゲット顧客の取り込みで成功し、無垢材家具だけでなく、仙台筆笥の売上も含めて大きく伸長、数年後には、仙台市内中心部に新店舗を構えるまでになりました。

しかしながら、新店舗を始めてみて気づいたことは、仙台という限られたマーケットだけでは、ある程度の売上は期待できるものの、一定以上の規模の拡大は難しいということでした。一方で、同様の店舗を東京等の大都市に出店することも検討しましたが、無垢材の家具を扱う店は数多あり、差別化が難しく、コスト面からもリスクの方が高い状況でした。そこで、閃いたのが、公的補助金制度を活用しての海外進出でした。タイミング良く補助金は獲得できたものの、その性質上、当初は、仙台筆笥のみでの海外進出となりました。最初に展示販売会を開催したのは、知り合いがいることもあり、ロサンゼルスからでした。その後は、香港、上海、シンガポール、



monmaya店内

台湾等アジア圏を中心に実施していきました。

アジア圏を中心に実施していった背景としては、ロサンゼルスでの展示販売会を実施した時に感じた、時差と物流コスト、そして渡航費の大きさに伴うリスクでした。海外展開が初めからうまくいくとは思えなかったもので、可能な限り、多くの場所に自分が直接行って、今後の課題を見つける上でも、時差が小さく物流コストも渡航費も安いエリアを選ぶ必要がありました。そして、何より、家具は生活の中で使う物なので、生活様式や体格等が近いアジアの方が、明らかに市場性が高いと考えたからです。そして、そのヨミも的中し、香港、上海、シンガポールの百貨店で実施した展示販売会においてはロサンゼルスをはるかに凌ぐ売上をたたき出しました。特にその3つの都市は、経済的にも日本よりも恵まれていることも大きかったと思います。

特に、香港での反響は大きく、その後も百貨店での展示販売会を定期的に行い、2017年9月からは常設の売場を構えるまでになりました。そして、2019年には、売上に占める日本国内と香港での売上が逆転したのです。ところが、その直後に、新型コロナウイルスが発生し、その後の2年間は国内外共に悲惨な状況となってしまいました。しかしながら、そのような状況だからこそ訪れたチャンスもありました。憧れの地でもあったハッピーバレーの賃貸料が大幅に下がっていたのです。物件情報は常にウォッチしていたため、下がった時はすぐに飛びつきましたが、現状を考えると、とても投資できるような余力はありませんでした。

散々、悩みましたが千載一遇のチャンスと捉え投資する事を決め、2021年12月に路面電車協の最高の立地にmonmayaをオープンさせました。オープン後もオミクロン株の発生等、色々とシビアな状況は続いておりますが、その一方で、想像以上の立地の良さにも助けられ、緩やかにではありますが、着実にビジネスを伸ばしております。新たに、住宅リノベーションや自社の仙台筆笥以外の日本の職人が作った製品や作品等の扱いも始め、アフターコロナに向けて準備万端です。



ハッピーバレーのmonmaya

OKINAWA

沖縄日本香港協会

沖縄日本香港協会 事務局

沖縄の餃子を香港へ

長期化するコロナ禍においても海外輸出を2割伸ばしている、沖縄食材を取り入れたオリジナル餃子の輸出が好調な、琉珉珉の比嘉竜児社長へインタビューをさせていただきました。

——御社の設立・会社概要を教えてください。

1965年、祖父の時代から浦添市で餃子を作っていました。その後、那覇市久米へ出店しましたが、店主である母が病気となり閉店しました。その後、母よりこの餃子を復活させたいと言われ、脱サラし、県内大手スーパー各店舗で惣菜として試食販売をした後、全店舗で販売させていただくようになり、2006年7月7日法人を設立しました。

——餃子を香港へ輸出されていますが、輸出されるきっかけを教えてください。

約10年前、沖縄産業振興公社の理事長であった安里氏より、香港で沖縄のえんグループが飲食店を展開しており、沖縄からの商品販売も広げている。と言う話をうかがい、香港・マカオのデパートやスーパーへ視察に行きました。行ってみたら飛行機で2時間しかかからない。東京より近いし、香港の方が可能性があるのではないかと感じました。

その後、えんグループ、沖縄ホーム、那覇ミート、琉珉珉の4社で、県の3年間の輸出促進事業を活用させていただきました。香港でバイヤーさんをお呼びして、実際にえんグループの店舗で餃子を焼き、商談会や試食会を開催しましたところ、香港のスーパーに商品を卸すこととなりました。

——香港における販売ルートを教えてください。

実際に販売し、1年半経過した頃、県の輸出促進事業やANA航空貨物補助事業が終了し補助が無くなれば、香港での販売は続かないのではないかとという危惧がありました。香港のスーパーでの販売は、1店舗1万円でも毎月30万円の棚代が出るため、思い切って方向転換し、棚代がかからない業務筋への販路開拓を行いました。現在では、香港・マカオを含むアジア地域に約1,000社、飲食店の取引先をもっている、卸業者のベストフーズさんを通して販売をしています。

——中華圏は水餃子が主ですが、輸出するにあたり工夫されていることはありますか。

ベストフーズさんでは、中国産の餃子も扱っていましたが、ラーメンと焼餃子は日本の文化だとおっしゃっていただき、単価が高くて受け入れていただくことがで

きました。香港のスーパーでは「日本国産」と書かれているコーナーがあり、日本のブランドは確立されています。そのため、パッケージは日本で販売してい



様々な種類の餃子を販売

るパッケージと全く同じものにしてほしいと指定がありました。味は日本で販売している餃子と同じ味で販売していますが、ワイン文化があるためチーズ餃子は新たに製造しました。

——食品衛生管理のHACCAPに沿ったJFS-Bを取得されたそうですが、商品開発にどう活かしていますか。

HACCAPも数種類あり、今回上のクラスのJFS-Bを10カ月かけ、令和4年6月3日に取得しました。取得後は、新聞にも掲載していただきました。工場に本土の量販店さんが視察にいらしたり、国内の大手スーパー各社から取引の打診をいただくなど、国内販路が広がりました。また、沖縄の駐留米軍からも引き合いが来ています。JFS-B取得により商品の品質・信頼性が向上したと思います。

——香港のマーケットの印象について教えてください。

香港における日本ブランドはすごいと思っています。スイカが1個7,000円で販売されていたり、イチゴのあまおうも高い。それが箱で売られています。デパートの高級食材売場では、大きなエコバッグに日本の食材を詰めて帰る人が大勢います。

日本の食材は本当に強く、沖縄の製品も可能性は大いにあります。沖縄の場合は地理的な優位性も利用すべきです。香港まで2時間しかかからないので必ず現地に行き、現地の商品を見たくて商談するべきです。数年で変わる現地の担当者に任せるようでは本当の意味での信頼関係が築けません。香港のバイヤーさんのリクエストにすぐ返事ができる、決断ができる人が行けば展開は早いと思います。

——今後の香港における事業展開を教えてください。

現在は、県産鶏の餃子を作り始めています。ダシが出てヘルシー感もあり、肉も独自技術で柔らかく仕上げており、スーパー以外にもドン・キホーテにも営業を行っています。コロナ禍となり香港の飲食店は18時までの時間制限の中で営業しています。夜は特に飲食店の動きが鈍くなっており、逆に昼食の開店時間が早くなるなど、パターンが変わってきています。今は巣ごもり需要もあり、売上は増加傾向ですが、そこに対応していくための商売の展開を考えなければいけないと思っています。



琉珉珉 代表取締役社長 比嘉竜児氏



広島日本香港協会令和4年度通常総会

令和4年7月1日(金)、広島日本香港協会令和4年度通常総会を広島県情報プラザにて開催いたしました。令和2年度、並びに令和3年度の通常総会は、新型コロナウイルスの感染拡大の状況を踏まえ、書面での決議となったことから、会場での開催は3年ぶりとなりました。

法人49会員、個人10会員、合計59会員のうち、12会員24名参加のもと、通常総会が行われました。会場での開催を行うことはできましたが、コロナ禍前の参加人数には至らず、その影響が色濃く残っております。

通常総会の冒頭、当協会の池田晃治会長から、「この2年間は、香港の方々との連携や会員の皆様同士の交流を深める行事や香港とのビジネス交流に関する事業などを中止せざるを得ませんでした。」との発言がありました。また、当日が7月1日ということもあり、「本日は、香港が中国に返還されてちょうど25年目の日にあたります。この25年もの間、経済自由度が高く、中国本土への入口として、多くの日本企業が香港に進出し、恩恵を受けてきました。今後も、交流が深まり、香港での事業拡大が更に進むことを願っております。」との挨拶がありました。

続いて、来賓としてお越しいただいた、香港貿易発展局のベンジャミン・ヤウ日本首席代表から、「香港・GBA（大湾区）構想の実現による香港の発展を目指している」「広島とのビジネス展開における連携を一層深めていきたい」とのご挨拶をいただきました。

その後、令和3年度事業報告及び令和3年度決算報告、令和4年度事業計画案及び令和4年度予算案、役員の選任について審議し、満場一致で承認され、閉会いたしました。なお、これまで通常総会後には、会員の交流を深めるため交流会を開催しておりましたが、新型コロナウイルス感染防止の観点から、中止といたしました。



ご講演の様子

◆ ご講演

来賓としてお越しいただいた、香港貿易発展局のリック・フォン大阪事務所長にご講演をお願いしました。



ベンジャミン・ヤウ首席代表ご挨拶

ご講演では、「日本のメディアでは報道されない 香港・GBA（大湾区）の今を知る」というタイトルのもと、お話いただきました。

講演内容として、香港の基本情報と今、香港の都市発展への取り組み、香港とグレーターベイエリア、香港の役割と現地企業の声、について解説いただきました。今後、香港においては人口が増加されることが予想される点、日本に対する愛着が深い点、依然として日本との輸出入において重要な関係にある点、日本の建築デザインが好評である点など、大変興味深い内容をお聞きすることができました。

ご講演後には、出席いただいた会員より、「本日の講演は、香港と日本とのビジネス交流の具体例に触れられ、身近に感じる内容が盛り込まれ、大変参考になった。」との言葉を頂戴しました。なお、本講演は、会員並びにひろしま産業振興機構の国際賛助会員を対象としたオンデマンドセミナーとして配信させていただきました。

また、香港貿易発展局の田中洋三大阪事務所次長からは、「香港貿易発展局の紹介」と題して、オンラインプラットフォームの案内や今年度実施される「アジア・グローバルヘルス・サミット」や「アジア金融フォーラム」などの紹介がありました。

引き続き、当協会では、会員の皆様と香港との相互理解と友好を促進し、経済の交流を図るための活動を展開して参ります。最後になりましたが、来年度の通常総会では、交流会を開催し、皆様との交流が図れることを期待しております。



通常総会の様子



NIIGATA

新潟日本香港協会

新潟日本香港協会 事務局 渡邊 明子

「香港特別行政区設立25周年記念
昼食講演会2022」を開催

新潟日本香港協会では、去る5月10日(火)にホテルオークラ新潟にて、2022年度通常総会、および香港貿易発展局と共催での「香港特別行政区設立25周年記念 昼食講演会2022」を開催いたしました。今回はその実施のご報告をさせていただきます。

この昼食講演会は、当初は今年2月に春節セミナーとして実施する予定でしたが、1月に新型コロナウイルス第6波が新潟にも到来し、感染者が急増してしまいました。それにより残念ながら中止せざるを得ない状況になり、実施は見送りとなりましたが、それからは5月の総会にあわせての開催ということで仕切り直し、香港貿易発展局の関係者の皆様の多大なるご協力のもと準備を進めてまいりました。準備期間中も、新型コロナウイルスの予測できない感染状況に不安を感じておりましたが、結果としては、ちょうど感染者も減少傾向にあった時期に無事に開催することができ、約50名の方にお集まりいただくことができました。お集まりいただいた皆様、また香港貿易発展局の皆様をはじめとする関係者の皆様、この場を借りて改めて深く御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

昼食講演会は、当協会吉田至夫会長の開会挨拶に始まり、香港貿易発展局ベンジャミン・ヤウ首席代表より歓迎挨拶をいただきました。また、来賓として、香港特別行政区政府駐東京経済貿易代表部首席代表代行トーマス・ウー様、新潟県副知事佐久間豊様、新潟市長中原八一様の3名からもご挨拶を賜りました。乾杯のご挨拶は中華人民共和国新潟総領事の孫大剛様をお願いし、歓談の後、株式会社北陸近畿クボタ代表取締役社長の久保様よりご講演いただきました。久保様は2016年1月



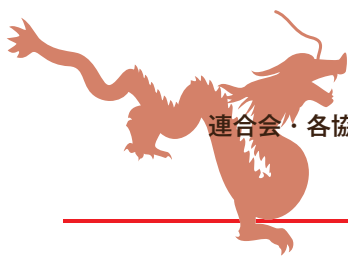
昼食講演会基調講演

に香港に赴任し、久保田米業（香港）有限公司総経理を務め、2021年12月まで香港での日本米の供給体制や製品の管理から販売ルートの開拓までの全般を監修された経験から、香港の日本食市場についてお話しいただき、大変有意義な講演会となりました。クボタグループでは2011年には0だった香港へのお米の輸出を2021年には2,732トンまでに伸ばしているとのことで、日本産米全体としての輸出量も世界的に伸びているとのことです。香港では、日本産米全体での輸出量は2011年に779トンだったのに対し、2021年は8,938トンに伸びているとのことで、コロナ禍でも着実に日本のコメ需要が世界中に拡大していることを改めて感じました。講演後には、香港貿易発展局東京事務所所長伊東正裕様より、香港貿易発展局からのご案内として、「国際化のパートナー香港と香港貿易発展局の役割」についてお話しいただき、最後は新潟日本香港協会高橋克郎副会長による閉会の挨拶をもって、昼食講演会は終了となりました。

新潟日本香港協会としては、今回の講演会を実施するまで、2020年の春節パーティーの開催以降、コロナ禍でなかなかリアルでの会合ができない状況が続いておりました。昨年5月の総会は久しぶりにリアルで開催できたものの、コロナ第4波到来により懇親会は中止となってしまいました。また、私個人としては事務局に着任したのが2020年4月で、コロナ禍での活動の経験しかなかったため、今回久しぶりに協会として飲食を伴う会合が行うことができ、参加者の皆様の親睦が深められたことが大変うれしく、大きな一歩に感じております。もちろんコロナ前と比べると実施形式等に様々な制約やルールが増えましたが、やはり顔を合わせての情報交換は、とても重要なものだと思っております。今後も新型コロナウイルスの収束は期待しつつ、今回のようにwithコロナでも出来ることを模索し、様々な事業を実施していきたいと考えております。また、香港フォーラムやアジアフォーラム等、コロナ前と同様に盛大に開催される日が来ることを待ち遠しく思っています。



昼食講演会歓迎挨拶



香港特別行政区設立25周年記念 昼食講演会2022

暑い日が続いておりますが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

今年は香港特別行政区設立25周年記念行事が各地協会で開催されます。高知協会においても代理ではありましたが高知県知事、高知市長の祝辞をはじめ、行政執行部、各産業界を代表する方々のご臨席のもと、盛況のうちに執り行われました。また開催にあたっては、ベンジャミン・ヤウHKTDC日本首席代表、トーマス・ウーHKETO首席代表代行、フランキー・ウー味珍味有限公司会長、リッキー・フォンHKTDC大阪事務所長をはじめとする、多くの皆さまにご来高いただき、あらためて心から歓迎と感謝を申し上げます。講演会では、フランキー・ウー様、並びにリッキー・フォン様より、香港、アジアの現状を生声として届けていただきました。今後の香港の在り方、ビジネスチャンスの展望、またビジネス展開にあたっては、この上ないパートナーが香港協会であると知ったことは、参加者も大変有意義だったと大好評の講演でした。久しく香港を訪問できていない会員も、一日も早い香港への渡航を熱烈に期待する時間にもなりました。香港貿易発展局の皆さまには開催まで大変なご尽力をいただきましたこと、重ねて御礼申し上げます。



25周年記念行事

一方、第6波以降、一旦は落ち着きをみせていたコロナの影響ですが、夏を境に再拡大をしており、7月21日に予定されていた2022年高知日本香港協会総会も延期いたしました。なかなか終息の気配を見せない状況に忤怩たる思いを募らせているところですが、総会の再考をはじめ、状況を鑑みながら積極的に定例会や研修を企画してまいります。

九州方面研修視察旅行

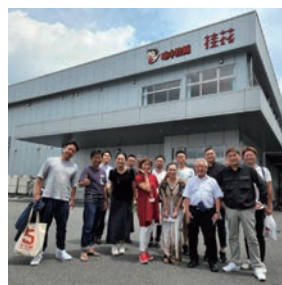
さて、本号では7月12日から2泊3日で実施した研修ツアーについてご報告いたします。

約2年ぶりの開催となった、高知日本香港協会研修ツアーは九州方面、熊本県と福岡県でのツアーを企画いたしました。当協会森本麻紀会長が日頃より懇意にしております、香港にも縁が深い味千ラーメン（重光産業株式

会社）重光悦枝副社長にコーディネートを依頼し、1日目の熊本では地元食材をふんだんに使った人気のお店「銀杏釜めし」にて、重光副社長を囲んでの懇親会を開催。馬刺しをはじめ地元ならではの献立に舌鼓を打ちながら、重光副社長の高知協会での講演をきっかけにご縁をいただいたJUNGLE SOUP CURRY（福岡県筑後市）を経営する大野まどか代表もご参加の中、懇親を深めました。



重光さん大野さんを交えて会員同士の懇親会



重光産業玄関口にて記念撮影

翌日には、写真にある重光産業にて工場見学を実施し、全世界800店舗以上を展開する味千ラーメンの経営について重光副社長、工場長より、この先世界1,000店舗を目指す、文字通り世界ナンバーワンへのチャレンジについて講義を賜り、海外ビジネスや店舗展開、また味への追求など見識を深めました。工場見学では徹底した衛生管理に加え、独自の製粉、製麺の過程、また人気の餃子の生産数など、大変大きな感銘を受けました。その後、今回のツアーのメインでもある味千ラーメンファンにとっての聖地、味千ラーメン本店にて実食。歴史と想い、そして仕込みの過程を学んできた実食はこの上ない至福のひとつでありました。2日間に渡りアテンドをいただきました、チィちゃんこと重光副社長にあらためて感謝いたします！

その後は、福岡への道中、前日にご一緒だった大野まどか代表が経営するJUNGLE SOUP CURRYへも訪問し、これまた世界を目指す絶品のスープカレーを堪能。こだわり抜いた味に、皆スプーンが止まらず終いとなりました。

本文では書き切れないほど充実した3日間の研修でしたが、久しぶりとなる会員同士の交流はとても濃密であり、コロナ禍ではありましたが思い切って実施して良かったと感じております。次回は同志協会の皆さまとの交流を兼ねた研修ツアーを企画いたしますので、訪問いたしました際には是非よろしく願いいたします。

未だ先行きの見えない状況下ではありますが、会員並びに協会の発展のために今後も最善を尽くしてまいります。



味千ラーメン本店にて！どれも絶品でした！



飛 龍

URL <http://www.jhks.gr.jp>

日本香港協会全国連合会 電話 (03) 5210-5901
〒102-0083 千代田区麹町3-4 トラスティ麹町ビル6階
香港貿易発展局内

NPO法人日本香港協会（東京） 電話 (03) 5210-5870
〒102-0083 千代田区麹町3-4 トラスティ麹町ビル6階
香港貿易発展局内

関西日本香港協会 電話 (06) 4705-7030
〒541-0052 大阪市中央区安土町2-3-13 大阪国際ビルディング10階
香港貿易発展局内

中京日本香港協会 電話 (06) 4705-7030
〒541-0052 大阪市中央区安土町2-3-13 大阪国際ビルディング10階
香港貿易発展局内

九州日本香港協会 電話 (092) 260-3748
〒810-8629 福岡市博多区中洲2丁目6-10 株式会社ふくや内

山形日本香港協会 電話 (023) 665-1310
〒990-2301 山形市蔵王温泉丈二田752-2
ユニテ蔵王ジョーニダ・リゾート内

北海道日本香港協会 電話 (011) 261-4288
〒060-8661 札幌市中央区大通西3-7 北洋銀行国際部内

宮城日本香港協会 電話 (022) 226-7025
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-5 第三志ら梅ビル2階西
(株)Sola.com 内

沖縄日本香港協会 電話 (098) 8686-3758
〒900-0033 那覇市久米2-2-10 那覇商工会議所内

広島日本香港協会 電話 (082) 248-1400
〒730-0052 広島市中区千田町3-7-47 広島県情報プラザ3階
(公財)ひろしま産業振興機構 国際ビジネス支援センター内

新潟日本香港協会 電話 (025) 365-0001
〒951-8065 新潟市中央区東堀通一番町494-3 2階 愛宕商事株式会社内

高知日本香港協会 電話 (088) 855-9570
〒780-0056 高知市北本町4-4-7 パールマンション1301
株式会社オルトル内



ビールを超える。自分を超える。

brewed for the people

carbon
brews



香港生まれのクラフトビール カーボンブリューズ

「carbon brews」は、2018年に香港の工業地帯「火炭（Fo Tan）」で誕生しました。

アジアと西洋が交差するミックスカルチャーの香港で
個々の想像を超えるアイデアが次々と生まれ、革新的な醸造へとつながります。

遊び心ある自由でクリエイティブなレシピとフレーバーで、

舌の肥えたビアゲークをうならせるだけではなく、

ビールが苦手だと思っているビアビギナーにもワクワクしてほしい！

『枠にとらわれない』それが私たち、「carbon brews」です。

special coupon!

carbon brews のオリジナルビール **15%OFF!**

■ご注文の際、本冊子をご提示ください。■有効期限：2022.12.31

carbon brews
tokyo

2022年3月に東京・赤坂にオープンしたタッブルームでは、「carbon brews」のクラフトビールとともに、香港で古くから親しまれる家庭料理や屋台料理を中心としたビールに合う個性豊かな香港料理を提供しております。

Carbon Brews Tokyo

〒107-0052 東京都港区赤坂 3-14-2 B1

Tel: 03-6426-5332

Mon-Sat 16:00~23:00 (Sun/Closed)

- 東京メトロ「赤坂駅」徒歩 3 分
- 東京メトロ「赤坂見附駅」徒歩 5 分
- 東京メトロ「溜池山王駅」徒歩 8 分



follow us! /



@carbonbrewsjapan